

日本の法を海上で執行 他国との協力も焦点に

陸上に領土があるように、海上には領海というものがありません。領海はしばしば「自国で独占的に海洋資源を利用できる領域」と理解されていますが、もともとは各国が自らの責任で安全性などを確保し、資源を守るなど、適切に管理しなければならぬ水域なのです。私たちは日本の領海内の安全性を維持すると同時に、JICAと協力して沿岸諸国を中心に人材育成などの支援をしています。それは、いずれも国際社会の一員としての活動です。

海上行政には船が必要で、欧米では主に海軍がその役割を担っています。日本では戦後、再軍備を避ける方針を維持してきたため、アメリカの沿岸警備隊をモデルに、海上保安行政を一カ所に集約する組織として海上保安庁が作られました。初代長官の故・大久保武雄氏は、海上保安庁のモットーは正義と仁愛だという訓示を行いました。相手が誰であっても人命を救う仁愛の精神と、海上で法と秩序を守り、平和を維持していく過程の中に、専門家や巡視船の派遣、各国の人材育成といった国際協力が含まれています。それは、ひいては日本人の安全を守ることにもつながるのです。

輸や密航など、海を舞台にした犯罪のリスクが高まりつつあるといえます。しっかりと海を見守っていくことが重要な時代が来たのです。

海上保安庁の専門家や、時には国際緊急援助隊を派遣することで、海上安全のノウハウを他の沿岸諸国と共有することは、日本の海を守り、日本の安全を守ることに繋がります。海上犯罪はもちろん、海難救助や、活動の基礎となる海図作成の知識など、海上保安庁ができる国際協力の形は、実にさまざまです。

自分の考えを持って 他人を理解し視野を広げる

私は1973年、沖縄の返還記念として行われた若夏国体に福井県代表として参加しました。そのとき、沖縄へのフェリーに乗ったことがきっかけで海に興味を持ち、海の仕事を志しました。海上保安大学校を出て初めて船に乗ったとき、外国船の海難救助に当たり、助けた人たちと話そうとしても言葉が通じないことにショックを受けたのです。そこで、海外での経験を積みたいと考え、自分の判断で青年海外協力隊の募集試験を受けました。ちょうど国際化の波が来ていたおかげか、合格を報告すると休職扱いにしてもらえることになって、2年間、バン格拉デシュで航海術の指導を行いました。現地では、地元の人たちと交流したり、現地へ赴任している国連職員の家族に英語を教えるもらったりして、日本では

特別インタビュー



海上犯罪取締研修の一環で行われた、捜査機材の取り扱い実習。犯罪対策には国際的な協力が不可欠となっている



海上保安庁は、各国に隊員を派遣するなどの活動も積極的にしている。スリランカで指導する隊員

海上保安庁長官 中島 敏さん

きなかった経験を積みました。そこで気付いたのは、日本の素晴らしさです。

あるとき、バン格拉デシュの新聞に、「東京で10分間の停電があった」という記事が載りました。より正確には、東京で起きた10分間の停電が日本のトップニュースになった、ということが記事にされたのです。1億人を超える人口を抱えるバン格拉デシュでは、インフラが整っておらず、当時は停電が起きるのは当たり前でした。

また、かつてバン格拉デシュは、ウルドゥー語を話す現在のパキスタンと一つの国でしたが、ベンガル語というアイデンティティが強く、パキスタンとは別の国として独立することになりました。言語や文化に基づくアイデンティティの重要性は、バン格拉デシュで生活していて覚えたことです。

また、海上保安庁の業務で大洋州に派遣されたとき、資源や産業に乏しい

ツバルで、人々が比較的涼しい墓地でのんびりと午睡を取っているのを目にしました。日本は経済的に成長しましたが、多くの人は時間に追われる生活をしているように思います。本当の豊かさとは何か、考えさせられました。

私は青年海外協力隊として航海術を教えるに行きましたが、それ以上に私自身がバン格拉デシュで出会った人たちに多くのことを教えられました。その経験を通して、他人を理解するためには、自分というものをしっかり持つていなければならないと感じました。若い人たちは真つ白なキャンパスを持っているようなものです。自分の個性を自覚した上で視野を広げ、自分というキャンパスに絵を描く過程を大切にしてほしいと思います。そのため、協力隊やJICA専門家、その他のボランティア活動など、世界を経験していくことには大きな価値があるでしょう。

海の安全は国際連携の時代へ

中島 敏 (なかじま・さとし)
福井県出身。海上保安大学校を卒業し、海上保安庁に入庁。その後、同庁に籍を置きながら、休職して青年海外協力隊に参加した経験を持つ。2016年6月、海上保安庁長官に就任。

